研究会報告

租界・居留地班　第 79 回研究会

中国の SP レコードと上海の流行音楽

日時：2022 年 9 月 22 日（木）15:00〜17:00
場所：対面＋Zoom のハイフレックス開催
対面会場：横浜キャンパス・非文字資料研究センター会議室

西村　正男（関西学院大学　社会学部　教授）

本報告は、2022 年 9 月 22 日に神奈川大学横浜キャンパスにおいて（オンラインとのハイブリッドで）行われたものである。百代（パテ）を中心とする民国期における上海のレコードについて話すように求められての報告であったが、近年は報告者自身中国のレコード産業史に対する研究は休眠状態であった。だが、折しも、SP レコードについての基礎知識や資料整理などについて詳しく解説した毛利眞人『SP レコード入門―基礎知識から史料活用まで』（株式会社スタイルノート、2022、以下毛利本）が発売された。そこで本報告は、同書の章立てに導かれる形で、中国の SP レコードを知るためのノウハウを確認する、という形を採った。その後、応用編として、私自身がレコードの情報を利用してどのような研究を行っているのかを紹介した。

1　SP レコードの扱い方

報告ではまず毛利本第一章「SP レコードの扱い方」の第一節「SP レコードの買い方」を参照し、中国のレコードの入手方法について述べた。

日本において最も一般的な SP レコード入手方法は、日本最大のオークションサイト「ヤフオク」の利用ということになるだろうが、中国のレコードも「ヤフオク」で見かけることはある。だが、珍しいレコードに対しては海外からの入札もあるようで、高騰する傾向にある。中古レコード店では、最大手の富士レコード社（神保町）などでもごく稀に見かけることはある。一方、海外のオークションサイトに目を向けると、最大手の eBay にはマレー半島の華人の出品者も多く、これを利用するのが最も容易に入手できる方法だと思われる。

かなり以前のことになるが、私は北京の潘家園旧貨市場、上海の東台路、多倫路などの古物商でも SP レコードを購入した経験がある。最近の状況はよくわからないが、中国の経済状況やコレクション・ブームにより高騰しているものと思われる。中国のネット古書サイト、孔夫子旧書網でも SP レコードは出品されているが、レコードが割れて届いた経験があり、また海外から購入するハードルも高く、こちらも最近は利用していない。

2　SP レコードの歴史

毛利本第二章「SP レコードの歴史」では、海外および日本の SP レコードの歴史が詳述されている。だが、これまでのレコードの歴史に関する書籍と同様、中国のレコード史については言及がない。発表者もかつて論文「中国における Victor レーベルの軌跡―謀得利、役挫・物克多から勝利へ」（『饕餮』13 号、2005）を著したことがあるが、中国のレコード史についてはその後、様々な新しい研究成果が発表されている。

そのうち、特に重要なのは葛濤『唱片与近代上海社会生活』（上海辞書出版社、2009）と王鋼、杜軍民編著『孫中山及辛亥革命音頻文献』（文心出版社、2017）であろう。前者は上海社会科学院の研究者による中国レコード史研究である。後者は在野の研究者による孫文に関する音源を収録した CD と、それに対する大部の解説書であり、中国におけるレコードの歴史を記したものとしても読み応えのある内容となっている。なお、未見だがオーストリアのフォノ・ミュージアム（Phonomuseum）で *Contribution to The Record Industry* と題された一連の出版物が出ており、その 11 巻は中国特集のようである。

毛利本では、日本の SP レコードがたどった出張録音から国産化へという歴史が詳述されているが、中国でも同様に出張録音から国産化へという歴史をたどった。また、毛利本には戦時下において資材不足により、レコードの材料として合成シェラックが用いられたことについて記述がある（p. 86）が、上海のレコードの盤質は、日本プレスに比べ良好であることも付け加えておきたい。

その他、口頭の報告の際には出張録音から国産化への流れ、戦時下のレコードの盤質にも触れ、毛利本が記す日本の会社が制作した海外向けレーベルについて若干の疑義を述べたが、ここでは省略する。

写真1　小栄福「女起解」百代 33080

写真2　初期百代のスリーブ

写真3　馬連良・王玉蓉『武家坡』百代 35278～35283

3　SP レコードの基礎知識

毛利本第三章は「SP レコードの基礎知識」である。ここでは SP レコードをめぐる様々な情報が解説されるが、報告ではそのうち、「片面盤と両面盤」「横振動と縦振動」「レーベル」「スリーブ」「歌詞カード」「アルバム」について、中国の百代レコードの現物写真を提示しながら説明した。写真 1 は 1920 年前後と思われる百代レコードの写真である。これは片面盤・縦振動のレコードである。また、初期の百代のレコードは、中央にレーベルが貼り付けられるのではなく、盤面に文字が直接刻み込まれていた。この時期のフランス・パテは縦振動方式を採用していたため、百代のレコードも縦振動方式であった。その後縦振動は淘汰され、百代も横振動方式へと移行し、レーベルが貼り付けられるようになる。報告の際にはそのレーベルの変遷および歌詞カードについても紹介したが、ここでは割愛する。

レコードを収納する紙袋であるスリーブについては、報告の際には百代の初期のものと電気録音の時代以降のものを紹介した。ここでは珍しい、初期百代のスリーブの写真を掲載しておく（写真 2）。次に、アルバムについてである。一般的な 10 インチの SP レコードは一般的に片面三分半ほどしか収録できなかったため、長尺の曲などは、写真を収めるアルバムのようにブック型ケースに収納されて販売されるようになった。後の LP や CD の時代になっても、複数曲を収録したものをアルバムと呼ぶのはこれに由来する。報告の際には管紹華・王玉蓉による『四郎探母』のアルバムを紹介したが、ここでは馬連良・王玉蓉『武家坡』のアルバム写真を掲げておく（写真 3）。

4　SP レコードのメタデータ／SP レコードのデータベース

毛利本の第四章は「SP レコードのメタデータ」、第五章は「SP レコードのデータベース」である。第四章ではレコード現物のレーベルや刻印から、どのような情報が読み取れるのかが論じられる。中国の百代レコードでも、ニッチク川崎工場でプレスされたレコードには「納付済」刻印や税率に関する刻印が見られ、製造時期が特定できる。

毛利本の第五章は SP レコードについての各種目録やデータベースが紹介されている。では中国の場合はどうだろうか。中国の SP レコードについての目録として最も重要なのは、『中国唱片廠庫存旧唱片模板目録』（中国唱片社、1964）だろう。この目録には中華人民共和国建国後、人民唱片、さらには中国唱片へと引き継がれた一万面（レコードの片面を面と数える）以上のレコード原盤の題名と演者、原盤（マトリクス）番号が記されている。収録されているレーベルは百代とそのサブ・レーベルの麗歌（リーガル）、そして勝利（ビクター）、高亭（オデオン）、蓓開（ベカ）、和声などである。百代、麗歌、高亭、蓓開などのレコードのうち、日本蓄音器商会（日本コロムビア）の川崎工場でプレスされたものについては、『日本コロムビア外地録音ディスコグラフィー—上海編』（人間文化研究機構連携研究「日本コロムビア外地録音のディスコグラフィー的研究」プロジェクト、2008）も参考になる。こちらにはレコード番号はあるが、原盤番号は原則として記されていない。これは日本コロムビアから国立民族学博物館に寄贈された中国を含む「外地」向け録音の原盤の目録を整理したものである。

5　応用編：私自身のレコード情報を活用した研究

報告の際には、最後に周旋（周璇）「何日君再来」（百代 35333a/b）のレコード・レーベルから読み取れる情報から、どのように研究を展開できるのかについて述べた。詳しい内容については、近刊の論文集（ミネルヴァ書房）に収められる拙稿に記したので、そちらを参照されたい。

報告の際には、皆様から貴重な意見を頂いた。一々お名前は挙げないが、ここにお礼を申し上げる。